

# めぐりつと紫波

発行者 NPO法人紫波みらい研究所  
TEL019-671-2244 FAX019-671-2243  
E-mail miraiken@shiwa-mirai.com

紫波町では、官民協働で町内の森林を保全し、育てることにより、森林資源循環と林業の活性化に繋がっています。前号では、企業による紫波の森づくり活動をご紹介しましたが、今号では、大学生や町内の民間団体やNPOの活動をご紹介します。



## 大学生と町民の交流による『里山づくりプロジェクト』



地元住民から指導を受け、木を伐る大学生

平成16年、紫波町の木造建築物を視察に訪れた國學院大学の楠原教授(現・同大学名誉教授)が、「地元住民との交流から生きていくための知恵や経験を学ぶ生きた授業が必要だ」と考えました。その「紫波町で学生を受け入れてほしい」という思いに、本研究所と会員、町が応え、この活動がスタートしました。

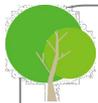
紫波町らしい活動ということで、都会の学生の力を借り、地域住民の交流をとおした里山再生に携わってもらうという計画を立てました。ナタやノコを使った実質2日間の山仕事体験。大学生の活動を地域住民に知ってもらい、「ゆいっこ」の精神で住民自らの森林整備に繋げるため、2年ごとに活動の地域を変えました。また、3泊4日、大学生の宿泊先は地域の公民館等とし、住民との交流

の機会を設けてきました。現在は、國學院大學に限定せず、県内の大学生にも参加を呼びかけています。活動を経験した卒業生の中には、なんと紫波町に移住してきた人もいます。森林組合に就職した人、佐比内で有機農業に従事し産直等に農産物を出荷している人、教師として移住し現在さらなる勉学のため外国に行っている人(いずれは紫波に戻る予定)など。その他にもこの事業に参加したことがきっかけで、全国各地でまちづくりの活動をしている卒業生がたくさんいます。

年々、活動を重ね、内容が山仕事中心になりかけたある時、「学生たちは山仕事だけを学ぶために来ているのではない」と卒業生の一人が言いました。人と人との交流をとおして学ぶものがいかに大切なものであるか、原点に立ち返る思いがしました。



作業現場での記念撮影



# 山仕事を安全に行うための『山仕事初級教室』



NPO 法人紫波みらい研究所では、紫波の森の整備をはじめよう!ということで、山仕事の初級教室を年10回実施しています。

森林ボランティアをしたいが技術がない人や自分の山を持っているが手入れができない人のために、山の整備を安全にできる人材を育てることが目的です。背景には、森林整備の担い手の高齢化や経済的な問題などの理由により山が荒廃しているという現状があります。

この事業を実施することにより、森林整備の担い手が増え、紫波の森の整備が進むことを目標としています。また、間伐材の搬出を行い、木質バイオマスエネルギーとして利用することは、化石燃料の使用を減らし地球温暖化防止につながります。

この教室は、今年で4年目になりますが、受講生の技術は着実に向上しています。そろそろ、受講生同志で組織を立ち上げ、安全に紫波の森の整備に向かう日も近いのではないのでしょうか。



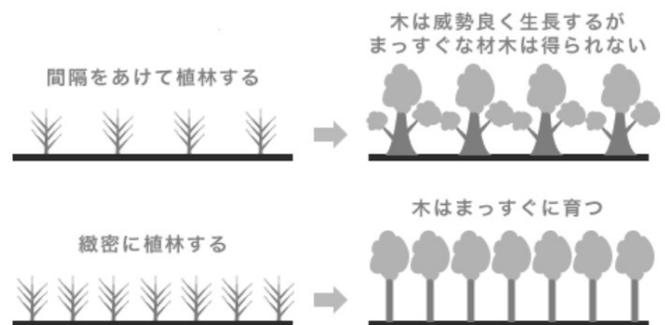
今年は女性が7人も受講

ちなみに、なぜ、このような間伐が必要なのでしょう。全国森林組合連合会のHPから紹介します。

## ●なぜ間伐が必要なのか？

人工林では、一定面積内に非常に多くの本数の苗木を植え、数年ごとに間伐をくり返し、木の成長にあわせてその都度、適正本数を保つように調整している。その間伐ができなくなっている。そこで、林業のことをよく知らない人の頭に浮かんでくるのは、そもそもたくさんの苗木を植えるから、間伐しなくてはならない。だとしたら、最初から30年後とか50年後の適正本数だけ植えればいいではないか、という疑問である。

杉や檜、松などの針葉樹は密集して植えることによりまっすぐ育つ。材として商品価値を持たせるためには、まっすぐな材が望ましいのである。まばらに植えられた杉や檜は下のほうが太く、先端にいくに従って細くなる。木としては健全な成長ともいえるのだが、材としての商品価値は下がってしまうという。



成長に伴い、木々同士の間隔が狭くなっていく。ここで間伐を行うことにより、木々1本1本に日光や養分が行き渡るようになり、健全な木を育てることができる。また、間伐後は地表にも十分な日光が当たるため、周辺の草花が育ち、過度の雨や風から地表の土を守ってくれる。枯れた草花は肥料となり、豊富な土壌の保全にも役立つことになる。

## ●教室の参加者を募集しています!

毎年、5月から2月まで開催しています。

途中からの参加も大歓迎です。

紫波みらい研究所 電話 671-2244



## 『間伐材を運び隊』の活動

紫波町では、まだ、山仕事に従事するボランティア団体は組織されていませんが、山で伐られた間伐材を運ぶ団体は組織されています。それが、平成23年に設立された「間伐材を運び隊」です。会員数は約40人。活動日は第2土曜日。1回の活動で約20トン、年間約240トンもの間伐材を運び出した実績があります。

前頁でも紹介しましたが、紫波の山は、山主の高齢化や後継者不足などで山の手入れが進んでいません。たとえ間伐が行われても、木材価格の低迷で運び出すコストに見合わないこと、必要な作業道の整備が進んでいないことなどの理由で、間伐材が山に放置されているのが現状の様子です。

そのような状況の中、「間伐材を運び隊」のメンバーは、なぜ、活動しているのでしょうか。

### ◎CO<sub>2</sub>の発生抑制効果がある

植物は光合成によりCO<sub>2</sub>を吸収する。間伐材を山に放置するとせっかく吸収されたCO<sub>2</sub>が腐敗の過程で再び大気中に放出されてしまう

### ◎製品として使われる

木材は再生可能な資源なので、製品として利用できる。紫波町では、間伐材をごみ集積所や資源保管庫の建材として利用しているほか、チップに加工し、公共施設や一般家庭の燃料としても活用している。

### ◎会員の親睦の場となっている

無理しないことを合言葉に!



間伐材をトラックに積み込むメンバー



間伐材をチップ加工場に搬入するメンバー

「間伐材を運び隊」のメンバーは、平日、働いている人が多いため休日に活動していますが、月1回の活動日に参加すると、運び出した木材1トンにつき5,000ポイントのエコbeeクーポン券（紫波町独自の商品券）がもらえます。クーポン券は1ポイント1円として、エコ・ショップしわ認定店（現在37店舗）で利用できます。また、間伐材を指定された集積所に持っていき、現在1トンあたり1,000円の買取料がもらえます。運び隊のメンバーは、活動のご褒美として、たまにクーポン券を利用した飲みニュケーションを図っているということです。

現在では松くい虫の被害にあい枯れてしまった松も運び出しており、それらは町の木質バイオマス燃料として活用されています。

### ●運び隊ではメンバーを募集しています!

月1回、健康のため、町のため、みんなで汗をかきませんか。連絡をお待ちしています。

(一社)農林公社 電話 019-671-3525



# 『平成の森』の植樹及び育林

平成の森は、山王海ダムの西側に位置する面積1.1ヘクタールの町有林です。

この事業は、「木の実を熊に、用材（建築用）は人に」をテーマに、熊がエサを求めて里まで下りてくることなく、平成14年度から町主催で実のなる木を植えたのが始まりです。動植物と人との共生ができるよう広く呼びかけ、中学生や町民（親子）の多くが参加しています。

当初、森林の大切さを知り、地球温暖化防止にも貢献することを目的として開催。平成19年には本研究所が、平成20年からは山王海土地改良区との共催で実施。本研究所は自然観察会、植樹や育林など、町民に森の大切さを知ってもらう活動を行っています。一方、山王海土地改良区は、山王海ダムの機能や役割、農業水利事業の重要性を知ってもらうことを目的としています。



山王海ダムのしくみを学習



昼食はとてもおいしい「ダムカレー」

植樹の後、親子で木の枝を伐る

近年は、平成14年頃に植樹した栗の木が実をつけ、熊が喜んで(?)食べた痕が見られるようになりました。今では、参加した町民にもおすそ分けで、熊が困らない程度に栗拾いをしてもらっています。道路沿いの平坦な場所なので、景観にも配慮し色々な樹種を植えましたが、雪や陽が当たらないなどの影響があるのか、近年植樹した苗の成長が遅いように思われます。植樹も必要なことですが、今後は育林にも力を入れ、大切な森を育てていこうと考えています。